

日仏東洋学会 通信 第三号

一九八五年三月発行

会 員 総 会 報 告

昨年の六月二八日五時半から、総会に先立って、評議員会が日仏会館一階に新設のフォワイエ（談話室）で開かれた。出席者は、ヴァンデルメルシュ学長（職責上の名誉会長）、羽田明名誉会長、弥永昌吉、秋山光和、大地原豊、ユベール・デュルト、池田温、坂出祥伸、福井文雅、川崎ミチコ、弥永信美の諸氏。

その後、六時から二階会議室で会員総会を開催。次のような順序で会は進化した（敬称略）。

開 会 の 辞

羽田 明

議事（議長 大地原 豊）

1 昭和五九年度予算案審議の件

川崎ミチコ会計幹事が次の予算案を説明し、承認された。

収 入	普通会員会費	210,000
	(会員数106名中70名分予定)	
支 出	印刷費	90,000
	①『学会通信』第2号製作費	20,000
	②『学会通信』第3号製作費	20,000
	③『学会員名簿』製作費	50,000
	通信費	35,210
	①『学会通信』第2号発送費	5,210
	②『学会通信』第3号発送費	8,000
	③『学会員名簿』発送費	8,000
	④上記以外の切手・ハガキ代	13,000
	会合費	10,000
	消耗品費	20,500
	事務費	4,000
	雑 費	50,290
合 計		210,000

報 告 事 項

1 「学会通信」第三号の編集

石沢良昭「フランスにおける東南アジア研究の近況」と、弥永信美「フランスの東洋学関係書・新刊紹介」の掲載が予定されている旨、報告があった。

2 第四回「日仏 colloque (学術シンポジウム)」について

今回の主催当事者であるフランス側からの企画の申し入れが、事務局から報告され、他の会員からも補足説明がなされた。旅費と

滞在費の半額は自己負担となる上、参加者を選考する機関も本会には存在しないことでもあるので、議事にはなじまず、「参加希望者は福井主幹へ問い合わせられたい。」という議長言葉で終了。当日欠席された会員には、七月二〇日付の葉書通信で連絡がなされたが、詳しいことは、本号の別項を見られたい。

3 ヴァンデルメルシュ学長の離日

本号の「会員消息」欄と、『日仏会館・日仏協会 通信』二二号（昨年七月刊）とを参照されたい。

学術講演会

六月二八日の総会終了後、六時半より、同じく二階会議室において、ヴァンデルメルシュ学長が、日本語で次の講演を行ない、質疑応答もかなり行なわれた。

「亀トと占筮の関係及び易経の起源」

講演後、恒例のように、学長室でカクテル・パーティが学長招待で開かれた。間もなく日本を去って帰仏される学長の為に、会員を代表して秋山光和教授が送別の挨拶を述べ、全員で惜別の杯を挙げた。

会員消息

○ 秋山光和氏が「Institut de France（フランス学士院）の客員会員に推挙された。フランス学士院は、十七世紀ルイ王朝以来の伝統と格式とを今に伝え、現在は五つのアカデミーから構成されて

いるが、その一つに Académie des Inscriptions et des Belles Lettres がある。これまでは「碑銘・文学アカデミー」などと訳されているが、内実は自然科学や芸術、文学以外の人文科学一般を含むので、むしろ「人文科学アカデミー」と訳した方が判り易いであろう。秋山教授はこの「人文科学アカデミー」の会員に選ばれたのであり、日本人としては最初である。今秋十一月に認証式があり、続いて、新入会員としての講演を学士院で行なうことになっている。またその後にも、Collège de France（コレージュ・ド・フランス）での連続講演が予定されている。

○ 羽田明名誉会長と、大地原豊氏が、Société asiatique（フランス東洋学協会）の名誉会員に推挙された。

○ レオン・ヴァンデルメルシュ氏は、日仏会館学長の任期三ヶ年終了で、夫人ともども、昨年七月末日に離日し、東南アジアを歴訪して、フランスに無事帰られた。離日に先立ち、七月二二日には、帝国ホテルで、日仏会館・日仏協会主催の感謝告別の午餐会で開かれた。学長の後任としては、文化地理学専攻のオーギュスタン・ベルク Augustin Berque 教授が着任された。教授は日本語が堪能である。なお、この異動にもなつて、名誉会長の中の一名は、自動的にベルク学長に移ることとなる。

○ 金岡照光氏は、昨年十月三十日より十一月三十日まで、フランス政府（外務省）の招聘によって渡仏。パリのアジア研究所と、フランス国立高等研究院（E・P・H・E・、日本の大学院に相当する）

宗教学部門とで、敦煌文書と道教とについて、それぞれ講演と研究発表を行なった。教授は中国語会話に練達の士であり、フランスの中国研究者の多くも中国留学などで会話に長じているので、質疑応答も活発で、極めて好評であったようである、そのほか、氏はアジア研究所内の中国宗教研究の現状もつぶさに見聞して帰られた。それらの詳細については、いずれ『学会通信』に執筆していただく予定である。

▽ 新入会員

尾崎 正治 OZAKI Masaharu

大谷大学図書館 中国宗教史

立野 恵子 TATENNO Keiko

慶応義塾大学大学院 中国文学

都留 春雄 TSURU Haruo

京都大学教養学部教授 中国文学

第四回日仏学術シンポジウムについて

表記の件は、仏語では Je 4. Collique pluridisciplinaire franco-japonais (第四回日仏多領域学際研究集会) と称し、日本語では略して「日仏コロック」と言っています。これにつきましては、昨年三月十四日と六月二十八日との二度にわたり、会員総会で説明が種々なされ、さらには、七月二十日付の葉書による通信の記事によって、事務局から必要な事柄は会員各位に御連絡してきましたが、こゝでまとめて、詳しく申し上げることに致します。

日仏会館と、これに関係する二十三の学会とが母体となり、一九七六年から三年毎に、日仏交互に主催国となって、この日仏コロックは開催されてきました。

今年はその第四回目に当り、フランスが開催当事国になります。そこでフランス側が企画し、日本側が対応しまして、その結果、(昨年七月二〇日付の葉書通信で御連絡したのとは少し変わり)、今年は、数学、物理学、通信工学、地理学、海洋学、社会学、経済学、東洋学の八部門からなるコロックが計画されました。

フランス側がいくら良い企画をたてても、日本側にそれに対応できる学会もしくは責任者がいませんと、日・仏コロックは成立しません。東洋学部門を例にしますと、例えば、日本上代文学¹をテーマにしたいとフランス側で立案しましても、それに呼応して日本側に日本上代文学研究班が組織できませんと、そのテーマは東洋学部門のテーマとはならないのです。

前回までのロックでは、東洋学の分野では、日本学と美術史が主テーマでした。(V前学長の話によりますと、)そこで、今回は、「日仏東洋学会が新発足したことであり、中国と歴史学とを主テーマにしたい。」という意向がフランス側委員会に強くあったそうです。しかし、いろいろと検討された結果、今回の東洋学部門のテーマは、中国の三大宗教の一つである道教 *le taoïsme* を中心にして、「道教研究の現状」と「日本文化と道教」とが主テーマに決まり、日本側と呼びかけと申し入れが来ました。

フランスが道教研究の世界におけるパイオニアであり、かつ現在も研究の第一線にあることは学会周知の事実です。

このテーマの立案者は、パリのアジア研究所内の道教研究グループ(シッペールK. M. Schipper 教授主持)です。このグループの中には、Project Tao-tsang(汎ヨーロッパ、道教研究プロジェクト)という、国際的な企画のセンターが置かれていて、道教の文献整理、コンピューター処理の事業を、この十数年来、精力的にすすめており、すでに目録・索引類を数冊、公刊しています。

この道教研究グループは「道蔵研究五ヶ年計画」を現在進行中で、今年はその最終年になるので、この日仏ロックに参加して、日本人研究者と共同で、研究の仕上げをしたい、というのがフランス側企画の始まりのようでした。

日本人研究者としましても、どのようなコンピューター処理を進行中なのか、常々知りたいところでありましたので、フランス側からの

申し入れは願ってもないことであり、それに呼応する方向で考えていくことになりました。

しかしながら、大きな問題が二つありました。その第一は経費の問題で、参加者は、滞在費の半額と旅費の全額を自己負担することが、これまでのきまりになっています。昨年七月二〇日の葉書連絡の中に、「本学会としましては、参加者の渡航費、滞在費等の予算を獲得しようと、諸方面に尽力してはおりますが、極めて望み薄であるのが現状です。」と書きましたように、公的機関に経費を申請しましたが、調達は極めて難かしいのです。

第二の問題は、参加者をどのようにして決めるか、という問題です。参加できる会員は、他の学会とのバランスから考えましても、六人前後と限定されています。しかし、日仏東洋学会の中には、選抜する権限を任された委員会のような機関は存在しません。(これは今後の問題でしょう。)

右の難問題二つを解決するだけの力を現在の本学会は持っていませんので、六月の総会においてはフランス側の提案を報告しましたものの、議事としての内容にはなじまいたため、結局、「参加希望者は福井主幹へ問い合わせられたい」という大地原議長の言葉で終わったのでした。要するに、申し込み順で受けつける以外に、フランス側に呼応する方法は残されていなかったのです。

ところが、実に幸いなことには、総会直後のカクテル・パーティの席上で早くも申し込みに応じる方々があり、その後にも事務局へ問い合わせが来たりしました結果、七月上旬には定員の六名が満たされてしまいました。それ以後の申し込み者は、オブザーバーになる、ということです。(現地参加の方々は別です。)

その後、いろいろないきさつはありましたが、現在のところ、次の七名が参加予定者になっています。その方々についての簡単な紹介と、コロックでの発表題目(仮題)とを次に書きます。(アイウエオ順)
金岡照光——本号の「会員消息」欄を参照。発表題目は、「菩薩の中国的日本的変容——弥勒と布袋の場合——」

川崎ミチコ——昨年に中国大陸へ出張し、道教寺院と敦煌研究の現状を調査した。その方面の論著、多数。発表題目「疑偽經典とその歌謡化について——父母恩重經と十恩徳を中心にして——」

京戸慈光——滞仏中で、パリからの現地参加。敦煌文書を利用しての発表多数。発表題目は、「日本の疑似教典と道教」

坂出祥伸——昨年の CISHAN (国際東洋学会議) において、英文で口頭発表をするほか、議長などとして運営にも参加。国際会議に参加多数。発表題目は、「医心方」に見える道教的養生術」

高橋 稔——フランスを中心に、ヨーロッパに約一年滞在した経験がある。『六朝・唐小説集』(中国の古典 32 学習研究社 昭五七)の共訳者。発表題目は、「新出資料『東方朔置文』について——近代日本にまで生き残った中国古代の俗信仰——」

福井文雅——第二回(日本)、第三回(スイス)の「国際道教研究会議」、第一回日仏コロック(パリ)、一昨年の CISHAN の「儒教と道教」部門と「敦煌研究」部門へ参加。今秋のコロックでは、日本の「天皇」の称号と道教、というテーマで発表する。

山田利明——アメリカ、カリフォルニア大学・パークレー校へ留学。一昨年の CISHAN に参加。「敦煌と中国道教」(大東出版社 昭五八)の共編者。発表題目は、「平田篤胤と五嶽真形図」

オブザーバーとして、現在、アメリカ、カリフォルニア大学・パークレー校で仏教研究中の田中文雄氏が、アメリカから廻る予定です。

右の八人は、すべて日仏東洋学会の会員です。道教研究者は、このほかに日本には多数おりますが、日仏東洋学会に入会していない方々には、連絡できませんでした。

最近のフランス側からの連絡によりますと、できれば二〇代の若い研究者の参加も希望しているようでして、六名の定員には必らずしもこだわらないようでもあります。さらに多くの方々の参加が待たれます。ただし、発表用のフル・ペーパー(日本語でも良い)を、六月初旬までにパリの学会本部まで郵送しなければなりません。

コロックは、パリで十月上旬に開かれますが、丁度その頃、日本中国学会が京都大学を会場にして開かれることになっています。そこで

中国学会の方へ出なければならぬために、フランス行きを断念した
会員もかなりいるようで、残念なことです。

日仏会館から、次の「おしらせ」が届きました。公募の期間が短か
短かいため、今回は残念ながら締切りに間に合いませんが、ここに掲
載致します。

第二回（一九八五年度）渋沢・クロード賞公募について

昨年日仏会館が創立六十周年を迎えました機会に、創立者二人を
記念して、当会館と毎日新聞社との共催で、渋沢・クロード賞が
設定されました。十年前までは、同じく毎日新聞社との共催のクロ
ード賞がありました。それはフランス語の書物の邦訳に対して贈
られるものであります。渋沢・クロード賞はそれより範囲を拡
げ、翻訳に限らず、日仏両国において、それぞれ相手国の文化に関
してなされたすぐれた研究成果に対して贈られます。

両国でそれぞれ一名が受賞し、受賞者には東京・パリ間往復航空
券と、相手国での一ヶ月間の滞在費が贈呈されます。

一九八四年度には、次の方が受賞されました。

〔日本側〕 工藤庸子氏

アンリ・トロワイヤ「アレクサンドル一世」

および「イヴァン雷帝」の翻訳

（中央公論社、一九八二・八三年刊）

〔フランス側〕 エリザベート・フロレ氏

柳宗悦と民芸運動の研究

なお、フランスのマッソン社版「医学生物学大辞典（全六巻）」

を翻訳刊行されたメジカル・フレンド社に対し、特別賞が贈呈さ
れました。

今年度日本側では次記の要領でこの賞の候補を公募いたしますの
で、ふさわしい候補者をご推薦いただきたくお願い申し上げます。

記

1 賞の対象となる部門

文学、芸術、哲学、歴史、法律、
経済、人文科学、自然科学

2 候補者の年令

一九八五年十二月末日に満四十才未満の方。

3 対象作品の出版時期

一九八三年一月一日より一九八四年十二月三十一日まで。

4 宛先

一〇一 東京都千代田区神田駿河台二―三

日仏会館内 坂井光夫

（電話〇三―二九一―一四一）

5 提出書類

候補者略歴および業績書、応募または推薦の理由書、候補作品。

なお、形式は任意ですが会館に応募用紙が用意してあります。
6 締 切 一九八五年三月三十一日

編 集 後 記

○今回は、会員名簿をお届けし、日仏学術シンポジウムの準備状況について御報告することを主眼にしましたので、その他予定されていた記事は次号以下にまわしました。

○「会員消息」につきましては、事務局として知り得る範囲は狭いものですし、伝聞では誤報の場合も起り得ますので、今後は、御本人自身からも、遠慮なく自己申告をして下さるよう、ここでお願いしておきます。

○一九八五年度の会員総会は、六月七日（金）の四時から（役員会は三時半から）、京都の日仏学館で開かれます。近々、改めて御案内が届くはずですが、会員総会が関西で開かれるのは最初のことであり、多数の方々のお参加をお待ちしています。

○会費納入のための用紙を同封させて頂きました。どうぞ宜しくお願い致します。

○文部省補助金による「学者交換」につきましては、「通信」第二号に詳しく書いておきました。その申し込みは毎年のものでありますし、本号に載せました「洪沢・クローデル賞」公募も、同じく毎年のものであります。推薦の方が必ずしも全て通るとは限りませんが、チャ

ンスではありませんので、期日等をお忘れなく、奮って御応募下さい。
○今回お送りする会員名簿は、一九八五年三月現在のものです。なるべく完全を期しましたが、なお、誤記が残っているかもしれない。訂正すべきところがありましたら、ぜひ御連絡下さるよう、お願い申し上げます。なお、現在会員数は一〇九名です。

連絡先

〒一〇一東京都千代田区神田駿河台二一三

日仏会館内

日仏東洋学会事務局

（電）〇三一二九一一一四四